

## 和牛は大切な知的財産だ

～「鳥取県産和牛の保護及び振興に関する条例」と鳥取県の挑戦～



鳥取県知事 平井 伸治

### 1 はじめに

「やった。首席だ。肉牛の日本一だ。」

平成29年9月7日から11日まで「夢メッセみやぎ」で開催された「第11回全国和牛能力共進会宮城大会」。東日本大震災の津波の記憶が残る仙台の港で、復興の証となる和牛界の一大イベントだ。5年に一度開催される全国和牛能力共進会という晴れ舞台で、鹿児島県・宮崎県をはじめ有名巨大産地の名牛が揃う中、巨象に挑む蟻の如く、圧倒的な飼養頭数の少なさというハンディキャップを跳ね返し、鳥取和牛復活の夢を追いかけて、鳥取県は生産者と一体となり、種雄牛造成や計画交配など惜しみない努力を注ぎ込み、少数精鋭の愛牛とともに大勝負を挑んだのだ。その厳しい年月の末、最も名誉ある「花の7区」といわれる第7区総合評価群の肉牛群、すなわち枝肉の肉質を競う競技部門で、堂々全国第1位の快挙を成し遂げたのだ。

併せて、鳥取県勢は、9の審査区分中、第4区では肋張り賞、第5区で乳徴賞、第9区で優良枝肉賞の特別賞を獲得したほか各部門で近年にない高い順位を獲得する大躍進を遂げ、一気に日本全国の和牛生産者の注目の的へと躍り出た。

第7区の代表牛は鳥取県畜産試験場が保有する「白鵬（はくほう）85の3」であり、その子3頭を出品した生産者藤井英樹さん、岸本真広さん、西田佳樹さんは喜びを爆発させ、小職も会場に集結していた鳥取県の和牛関係者とともに喜びを分かち合い、更なる発展を誓い合った。積年の苦勞が報われた瞬間であった。人口も牛の数も僅か全国の0.5%程度しかない鳥取県が、わが国の和牛界を凌駕した。

小さくても勝てる。

チーム鳥取で勝ち取った新たな栄光であった。

### 2 鳥取和牛復活への挑戦

(1) 「鳥取和牛」は、中国地方最高峰である霊峰「大山（だいせん）」をはじめ中国山地の懐に抱かれ、澄んだ空気、伏流水などの恵まれた自然環境で育った牛だ。

元々は田畑の仕事に貢献した役牛であったが、牛肉を食する習慣がわが国で定着する時代の流れの中で、わが国和牛改良の端緒が開いたのは鳥取県であったという歴史がある。

大山寺（だいせんじ）直下の博労座（ばくろうざ）という地名に残るように、江戸時代の享保

年間から昭和12年まで大山で定期的に関かれた牛馬市は、日本三大牛馬市の一つに数えられるほど隆盛を極め、各地から牛を連れ集まった牛馬取引にあずかる「博労」達で賑わった。そもそも大山寺の創建時に現れたと伝わる地蔵菩薩は、生きとし生けるものを皆救うとされ、平安時代に大山寺の高僧「基好（きこう）上人」は牛馬安全を祈願する「守り札」を配り、山麓での牛馬の放牧を奨励した。「今昔物語集」にも、遠方からの参詣者が牛馬に供物等を運搬させた記録がある。全国各地から大山寺に大切な牛馬の健康長寿を祈りに来るならわしが広く行われ、時代を経て大山寺の守り札を牛舎の柱に貼り祈りを捧げる信仰が続いてきた。一方、大山山麓の牧野で育った体格の良い放牧牛や、参詣者が連れてきた牛馬もあって、大山寺の春の祭礼などで牛くらべ、馬くらべが催され、鎌倉時代以降牛馬の交換・売買が盛んになり、後世の牛馬市へと発展していく。

大山牛馬市は、大山寺の手を離れた明治維新以降も地域の経済の中核を担い、明治中頃には年5回まで市が増え、毎回数千頭から時には1万頭を超える牛馬が盛んに取引されるまで隆盛を極めていた。

(2) 国民の食生活の変容に応じて、明治政府は食用牛増産のため輸入雑種牛との交配を奨励したが、交配牛の品質は決して良好ではなく、鳥取県内で飼われる牛の頭数は急激に減少し、和牛生産農家の経営を悪化させることとなった。このような厳しい和牛農家の経営を再建するため、鳥取県では、本来の優れた和牛形質の再興を図ることで飛躍を目指すこととし、牛馬市で取引される県産和牛などを基礎として、全国に先駆け大正8年に鳥取県内で育成する和牛の改良目標である「因伯種標準体型」を制定し、更に翌大正9年には日本で初めて一頭一頭の牛を血統に基づき詳細に登録する「和牛登録事業」をスタートした。

すなわち、鳥取県こそわが国の和牛改良の端緒を開いたのであり、改良目標と血統登録に基づく本格的な和牛の育種改良の基礎を築いたのである。こうした和牛改良の重要性は広く認識され全国へと広がるようになり、昭和23年に全国和牛登録協会が設立され、和牛の改良と斉一化が急速に各地へ普及していくこととなった。

(3) 農家にとって生産効率向上を見込みやすい早熟・早肥・大型化という特長を高めた鳥取県の和牛改良の結実として、数々の重要な種雄牛が産み出されてきた。種雄牛「栄光」は全国和牛登録協会が昭和25年に創設した登録制度の最高峰である高等登録の第1号となった。更にその後育成された種雄牛「気高（けたか）」は、昭和41年に岡山県で開催された第1回全国和牛能力共進会において一等賞の栄冠に輝き、和牛界の向上に大きく貢献する種雄牛として高く評価され、その子孫は鹿児島県や宮崎県など全国各地の名牛のルーツとなる伝説の牛として、全国の和牛関係者の間では今でも広く知られる存在となっている。

ところが、平成3年の牛肉輸入自由化の頃から「霜降り」といったような肉質重視で市場価格が左右されるようになったにもかかわらず、鳥取県は気高系の早熟・早肥・大型化中心の和牛改良方針を固持して肉質改良に後れをとった結果、鳥取県産子牛価格は下落の一途を辿り、20年以上の長きにわたり全国平均を下回り、かつての和牛王国としての輝きはすっかり陰を潜めることとなった。

(4) このような窮状を打破し鳥取県の和牛産地としての再興を図るため、従来の和牛改良方針を一新し、気高系の良さを保ちつつも、肉質向上を強力に推進する母牛導入、種雄牛造成による改良を官民一体となって戦略的に展開することとした。平成19年に鳥取県米子市・大山町で「第9回全国和牛能力共進会鳥取大会」が開かれたものの、自県開催ながら課題の多い結果になったことは、鳥取和牛再興を目指して和牛生産者や関係団体、県行政が一層結束する導火線の役割を果たした。